

ゼロ弾きのゴーシユ



ゴーシュは町の活動写真館でセロを弾く係りでした。けれどもあんまり上手でないという評判でした。上手でないどころではなく実は仲間の楽手のなかではいちばん下手でしたから、いつでも楽長にいじめられるのです。

ひるすぎみんなは楽屋に円くならんで今度の町の音楽会へ出す第六交響曲（第六交響曲）の練習をしていました。トランペットは一生けん命歌っています。

ヴァイオリンも二いる風のように鳴っています。

クラリネットもボーボーとそれに手伝っています。

ゴーシュも口をりんと結んで眼めを皿さらのようにして楽譜がくふを見つめながらも一心に弾いています。

にわかにはたつと楽長が両手を鳴らしました。みんなびたりと曲をやめてしんとしました。楽長がどなりました。

「セロがおくれた。トオテテ テテテイ、ここからやり直し。はいっ。」

みんなは今の所の少し前の所からやり直しました。ゴーシュは顔をまっ赤にして額あせに汗を出しながらやつといまい云われたところを通りました。ほっと安心しながら、つづけて弾いていますと楽長がまた手をぱつと拍うちました。

「セロっ。糸が合わない。困るなあ。ぼくはきみにドレミファを教えてまでいるひまはないんだがなあ。」

みんなは気の毒そうにしてわざとじぶんの譜をのぞきこ込んだりじぶんの楽器をはじいて見たりしています。ゴーシュはあわてて糸を直しました。これはじつはゴーシュも悪いのですがセロもずいぶん悪いのです。

「今の前の小節から。はいっ。」

みんなはまたはじめました。ゴーシュも口をまげて一生けん命です。そしてこんどはかなり進みました。いいあんばいだと思つていと楽長がおどすような形をしてまたぱつと手を拍うちました。またかとゴーシュはどきつとしましたがありがたいことにはこんどは別の人でした。ゴーシュはそこでさつきじぶんのときみんながしたようにわざとじぶんの譜へ眼を近づけて何か考

えるふりをしていました。

「ではすぐ今の次。はいっ。」

そらと思つて弾き出したかと思ふといきなり楽長が足をどんと踏んでどなり出しました。

「だめだ。まるでなつていない。このへんは曲の心臓なんだ。それがこんながさがさしたことで。諸君。演奏までもうあと十日しかないんだよ。音楽を専門にやつているぼくらがああ金の沓鍛冶だの砂糖屋の丁稚なんかの寄り集りに負けてしまつたらいつたいわれわれの面目はどうなるんだ。おいゴーシュ君。君には困るんだがなあ。表情ということがまるでできてない。怒るも喜ぶも感情というものがさっぱり出ないんだ。それにどうしてもびたつと外の楽器と合わないもなあ。いつでもきみだけとけた靴のひもを引きずつてみんなのあとをついてあるくようなんだ、困るよ、しつかりしてくれないとねえ。光輝あるわが金星音楽団がきみ一人のために悪評をとるようなことでは、みんなへもまつたく気の毒だからな。では今日は練習はここまで、休んで六時にはかつきりボックスへ入つてくれ給え。」

みんなはおじぎをして、それからたばこをくわえてマッチをすつたりどこかへ出て行つたりしました。ゴーシュはその粗末な箱みたいなセロをかかえて壁の方へ向いて口をまげてぼろぼろ涙をこぼしましたが、気をとり直してじぶんだけたつたひとりいまやつたところをはじめからしずかにもいちど弾きはじめました。

その晩遅くゴーシュは何か巨きな黒いものをしよつてじぶんの家へ帰つてきました。家といつてもそれは町はずれの川ばたにあるこわれた水車小屋で、ゴーシュはそこにたつた一人ですんでいて午前は小屋のまわりの小さな畑でトマトの枝をきつたり甘藍の虫をひろつたりしてひるすぎになるといつも出て行つていたので。ゴーシュがうちへ入つてあかりをつけるとさっきの黒い包みをあげました。それは何でもなし。あの夕方のごつごつしたセロでした。ゴーシュはそれを床の上にそつと置くと、いきなり柵からコップをとつてバケツの水をごくごくのみました。

それから頭を一つふつて椅子へかけるとまるで虎みたいな勢でひるの譜を弾きはじめました。譜をめくりながら弾いては考え考えては弾き一生けん命しまいまで行くとまたははじめからなんべんもなんべんもごうごうごう弾きつづけました。

夜中もとうにすぎてしまいはもうじぶんが弾いているのかもわからないようになって顔もまっ赤になり眼もまるで血走つてとても物凄(ものすじ)い顔つきになりいまにも倒れるかと思うように見えました。

そのとき誰(たれ)かうしろの扉をとんとんと叩くものがありました。

「ホーシユ君か。」ゴーシユはねぼけたように叫びました。ところがすうと扉を押してはいって来たのはいままで五六ぺん見たことのある大きな三毛猫(みけねこ)でした。

ゴーシユの畑からとつた半分熟したトマトをさも重そうに持って来てゴーシユの前におろして云いました。

「ああくたびれた。なかなか運搬(うんぱん)はひどいやな。」

「何だと」ゴーシユがききました。

「これおみやです。たべてください。」三毛猫が云いました。

ゴーシユはひるからのむしゃくしゃを一ぺんにどなりつけました。

「誰(たれ)がきさまにトマトなど持つてこいと云った。第一おれがきさまらのもつてきたものなど食うか。それからそのトマトだつておれの畑のやつだ。何だ。赤くもならないやつをむしつて。いままでもトマトの茎(くき)をかじったりけちらしたりしたのはおまえだろ。行つてしまえ。ねこめ。」

すると猫は肩(かた)をまるくして眼をすぼめてはいましたが口のあたりでにやにやわらつて云いました。

「先生、そうお怒りになつちや、おからだにさわりませう。それよりシューマンのトロメライをひいてごらんなさい。きいてあげますから。」

「生意気なことを云うな。ねこのくせに。」

セロ弾きはしやくにさわってこのねこのやつどうしてくれようとしばらく考えました。

「いやご遠慮えんりよはありません。どうぞ。わたしはどうも先生の音楽をきかないとねむられないんです。」

「生意気だ。生意気だ。生意気だ。」

ゴーシユはすっかり赤になってひるま樂長のしたように足ぶみしてどなりましたがにわかになんか気を変えて云いました。

「では弾くよ。」

ゴーシユは何と思つたか扉とにかぎをかつて窓もみんなしめてしまい、それからセロをとりだしてあかしを消しました。すると外から二十日過ぎの月のひかりが室へやのなかへ半分ほどはいつてきました。

「何をひけど。」

「トロメライ、ロマチックシューマン作曲。」猫は口を拭ふいて済まして云いました。

「そうか。トロメライというのはこういうのか。」

セロ弾きは何と思つたかまずはんげちを引きさいてじぶんの耳の穴へぎつしりつめました。それからまるで嵐あらしのような勢いきおいで「印度インドの虎狩とらがり」という譜を弾きはじめました。

すると猫はしばらく首をまげて聞いていましたがいきなりパチパチパチと眼をしたかと思つたと扉の方へ飛びのきました。そしていきなりどんと扉へからだをぶつつけました。扉はあきませんでした。猫はさあこれはもう一生一代の失敗をしたという風にあわてだして眼や額からばちばち火花を出しました。するとこんどは口のひげからも鼻からも出ましたから猫はくすぐったがつてしばらくくしやみをするような顔をしてそれからまたさあこうしてはいられないぞというようにはせあるぎだしました。ゴーシユはすっかり面白おもしろくなつてますます勢よくやり出しました。



次の晩もゴーシュがまた黒いセロの包みをついで帰ってきました。そして水をごくごくのむとそっくりゆうべのとおりぐんぐんセロを弾きはじめました。十二時は間もなく過ぎ一時もすぎ二時もすぎてもゴーシュはまだやめませんでした。それからもう何時だかもわからず弾いているかもわからずごうごうやっていますと誰か屋根裏をこつこつと叩くものがあります。

「猫、まだこりないのか。」

ゴーシュが叫びますといきなり天井の穴からぼろんと音がして一疋の灰いろの鳥が降りて来ました。床へとまったのを見ろとそれはかつこうでした。

「鳥まで来るなんて。何の用だ。」ゴーシュが云いました。

「音楽を教わりたいのです。」

かつこう鳥はすまして云いました。

ゴーシュは笑って

「音楽だと。おまえの歌は、かつこう、かつこうというだけじゃあないか。」

するとかつこうが大へんまじめに

「ええ、それなんです。けれどもむずかしいですからねえ。」と云いました。

「むずかしいもんか。おまえたちのはたくさん啼くのがひどいだけで、なきようは何でもないじゃないか。」

「ところがそれがひどいんです。たとえばかつこうとこうなくのとかつこうとこうなくのとは聞いていてもよほどちがうですよ。」

「ちがわないね。」

「ではあなたにはわからないんです。わたしらのなかまならかつこうと一万云えば一万みんなちがうんです。」

「勝手だよ。そんなにわかってるなら何もおれの処ところへ来なくてもいいではないか。」

「ところが私はドレミファを正確にやりたいんです。」

「ドレミファもくそもあるか。」

「ええ、外国へ行く前にぜひ一度いるんです。」

「外国もくそもあるか。」

「先生どうかドレミファを教えてください。わたしはついでうたいますから。」

「うるさいなあ。そら三べんだけ弾ひいてやるからすんだらさっさと帰るんだぞ。」

ゴーシユはセロを取り上げてポロンポロンと糸を合わせてドレミファソラシドとひきました。するとかっこうはあわてて羽をばたばたしました。

「ちがいます、ちがいます。そんなんでないんです。」

「うるさいなあ。ではおまえやっこらん。」

「こうですよ。」かっこうはからだをまえに曲げてしばらく構えてから

「かっこう」と一つなきました。

「何だい。それがドレミファかい。おまえたちには、それではドレミファも第六交響樂「うきようがく」も同じなんだな。」

「それはちがいます。」

「どうちがうんだ。」

「むずかしいのはこれをたくさん続けたのがあるんです。」

「つまりこうだろう。」セロ弾きはまたセロをとって、かっこうかっこうかっこうかっこうかっこうかっこうとつづけてひきました。

するとかっこうはたいへんよろこんで途中とちゆうからかっこうかっこうかっこうとついで叫さけびました。それももう一生いっしゆうけん命めいからだをまげていつまでも叫ぶのです。

ゴーシユはどうとう手が痛くなつて

「こら、いいかげんにしないか。」と云いながらやめました。するとかっこうは残念そうに眼めをつりあげてまだしばらくないていましたがやつと

「……かっこうかっこうかっこうかっこうか」と云つてやめました。

ゴーシユがすっかりおこつてしまつて、

「こらとり、もう用が済んだらかえれ」と云いました。

「どうかもういっぺん弾いてください。あなたのはいいいようだけでもすこしちがうんです。」

「何だと、おれがきさまに教わつてるんではないんだぞ。帰らんか。」

「どうかたつたもう一ぺんおねがいです。どうか。」かっこうは頭を何べんもこんこん下げました。

「ではこれつきりだよ。」

ゴーシユは弓をかまえました。かっこうは「くつ」とひとつ息をして

「ではなるべく永くおねがいたします。」と云つてまた一つおじぎをしました。

「いやになつちまうなあ。」ゴーシユはにが笑いしながら弾きはじめました。するとかっこうはまたまるで本気になつて「かっこうかっこうかっこう」とからだをまげてじつに一生けん命叫びました。ゴーシユははじめはむしゃくしゃしていましたがいつまでもつづけて弾いているうちにふつと何だかこれは鳥の方がほんとうのドレミファにはまっているかなという気がしてきました。どうも弾けば弾くほどかっこうの方がいいような気がするのです。

「えいこんなばかなことしていたらおれは鳥になつてしまふんじゃないか。」とゴーシュはいきなりぴたりとセロをやめました。するとかっこうはどしんと頭を叩かれたようにふらふらつとしてそれからまたさっきのように

「かっこうかっこうかっこうかつかつかつかつ」と云つてやめました。それから恨めしうにゴーシュを見て

「なぜやめたんですか。ぼくらならどんな意気地ないやつでものどから血が出るまでは叫ぶんですよ。」と云いました。

「何を生意気な。こんなばかなまねをいつまでしてられるか。もう出て行け。見る。夜があけるんじゃないか。」ゴーシュは窓を指さしました。

東のそらがぼうつと銀いろになつてそこをまつ黒な雲が北の方へどんどん走っています。

「ではお日さまの出るまでどうぞ。もう一ぺん。ちよつとですから。」

かっこうはまた頭を下げました。

「黙れつ。いい気になつて。このばか鳥め。出て行かんとむしつて朝飯に食つてしまふぞ。」ゴーシュはどんと床をふみました。

するとかっこうはにわかにはびっくりしたようにいきなり窓をめがけて飛び立ちました。そして硝子にはげしく頭をぶつつけてばたつと下へ落ちました。

「何だ、硝子へばかだなあ。」ゴーシュはあわてて立つて窓をあげようとしたが元来この窓はそんなにいつでもする開く窓ではありませんでした。ゴーシュが窓のわくをしきりにがたがたしているうちにまたかっこうがばつとぶつつかつて下へ落ちました。見ると嘴のつけねからすこし血が出ています。

「いまあけてやるから待っているら。」ゴーシュがやつと二寸ばかり窓をあげたとき、かっこうは起きあがつて何が何でもこんどこそというようにじつと窓の向うの東のそらを見つめて、あらん限りの力をこめた風でぱつと飛びたちました。もちろんこんどは前よりひどく硝子につきあつたかっこうは下へ落ちたまましばらく身動きもしませんでした。つかまえてドアから飛

ばしてやろうとゴーシュが手を出しましたらいきなりかっこうは眼をひらいて飛びのきました。そしてまたガラスへ飛びつきそうにするのです。ゴーシュは思わず足を上げて窓をばつとけりました。ガラスは二三枚物すごい音して碎け窓はわくのまま外へ落ちました。そのがらんとした窓のあとをかつこうが矢のように外へ飛びだしました。そしてもうどこまでもどこまでもまっすぐに飛んで行つてとうとう見えなくなつてしまいました。ゴーシュはしばらく呆れたように外を見ていましたが、そのまま倒れるように室のすみへころがつて睡つてしまいました。

次の晩もゴーシュは夜中すぎまでセロを弾いてつかれて水を一杯のんでいきますと、また扉をこつこつ叩くものがあります。

今夜は何が来てもゆうべのかっこうのようにはじめからおどかして追い払つてやろうと思つてコップをもつたま待ち構えて居りますと、扉がすこしあいて一疋の狸の子がはいつてきました。ゴーシュはそこでその扉をもう少し広くひらいて置いてどんと足をふんで、

「こら、狸、おまえは狸汁たぬきぢゆということを知つてゐるかっ。」とどなりました。すると狸の子はぼんやりした顔をしてきちんと床へ座つたままどうもわからないというように首をまげて考えていましたが、しばらくたつて

「狸汁つてぼく知らない。」と云いました。ゴーシュはその顔を見て思わず吹き出そうとしましたが、まだ無理に恐い顔をして、「では教えてやろう。狸汁たぬきぢゆというのはな。おまえのような狸をな、キャベジや塩とまぜてくたくたと煮ておれさまの食うようにしたものだ。」と云いました。すると狸の子はまたふしぎそうに

「だつてぼくのお父さんがね、ゴーシュさんはとてもいい人でこわくないから行つて習えと云つたよ。」と云いました。そこでゴーシュもとうとう笑い出してしまいました。

「何を習えと云つたんだ。おれはいそがしいんじゃないか。それに睡いんだよ。」

狸の子は俄に勢がついたように一足前へ出ました。

「ぼくは小太鼓こだいこの係りですね。セロへ合わせてもらって来いと云われたんだ。」

「どこにも小太鼓がないじゃないか。」

「そら、これ」狸の子はせなかから棒きれを二本出しました。

「それでどうするんだ。」

「ではね、『愉快な馬車屋』を弾いてください。」

「なんだ愉快な馬車屋ってジャズか。」

「ああこの譜ふだよ。」狸の子はせなかからまた一枚の譜をとり出しました。ゴーシュは手にとってわらい出しました。

「ふう、変な曲だなあ。よし、さあ弾くぞ。おまえは小太鼓を叩くのか。」ゴーシュは狸の子がどうするかと思っただらちらそつちを見ながら弾きはじめました。

すると狸の子は棒をもってセロこまの駒こまの下のところを拍子ひょうしをとってぽんぽん叩きはじめました。それがなかなかうまいので弾いているうちにゴーシュはこれは面白いぞと思いました。

おしまいまでひいてしまうと狸の子はしばらく首をまげて考えました。

それからやつと考えついたというように云いました。

「ゴーシュさんはこの二番目の糸をひくときはきたいに遅おそれるねえ。なんだかぼくがつまづくようになるよ。」

ゴーシュははつとしました。たしかにその糸はどんなに手早く弾いてもすこしたってからでないと言音が出ないような気がゆうべからしていたのです。

「いや、そうかもしれない。このセロは悪いんだよ。」とゴーシュはかなしそうに云いました。すると狸は気の毒そうにしてまたしばらく考えていましたが

「どこが悪いんだろうなあ。ではもう一ぺん弾いてくれますか。」

「いいとも弾くよ。」ゴーシュははじめました。狸の子はさっきのようにとんとん叩きながら時々頭をまげてセロに耳をつけるようにしました。そしておしまいまで来たときは今夜もまた東がぼうと明るくなっていました。

「ああ夜が明けたぞ。どうもありがとう。」狸の子は大へんあわてて譜や棒きれをせなかへしよつてゴムテープでぱちんとめておじぎを二つ三つすると急いで外へ出て行つてしまいました。

ゴーシュはぼんやりしてしばらくゆうべのこわれたガラスからはいつてくる風を吸っていました。町へ出て行くまで睡つて元氣をとり戻そうと急いでねどこへもぐり込みました。

次の晩もゴーシュは夜通しセロを弾いて明方近く思わずつかれて楽譜をもったままうとうととしています。またまた誰か扉をこつこつと叩くものがあります。それもまるで聞えるか聞えないかの位でしたが毎晩のことなのでゴーシュはすぐ聞きつけて「おはいり。」と云いました。すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。そして大へんちいさな子どもをつれてちよろちよろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのこどもときたらまるでけしごむのくらいしかないので、ゴーシュはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわられたらうというようにきよろきよろしながらゴーシュの前に来て、青い栗の実を一つぶ前においてちゃんとおじぎをして云いました。

「先生、この児があんばいがわるくて死にそうでございますが先生お慈悲になおしてやってくださいまし。」

「おれが医者などやれるもんか。」ゴーシュはすこしむつとして云いました。すると野ねずみのお母さんは下を向いてしばらくだまっていました。がまた思い切ったように云いました。

「先生、それはうそでございます、先生は毎日あんなに上手にみんなの病気をなおしておいでになるではありませんか。」

「何のことだかわからんね。」

「だって先生先生のおかげで、兎さんのおばあさんもなおりましたし狸さんのお父さんもなおりましたしあんな意地悪のみみずくまでなおしていただいたのにこの子ばかりお助けをいただけなのはあんまり情ないことでございます。」

「おいおい、それは何かの間ちがだよ。おれはみみずくの病氣などなおしてやったことはないからな。もつとも狸の子はゆうべ来て楽隊のまねをして行つたがね。ははん。」ゴーシュは呆れてその子ねずみを見おろしてわらいました。

すると野鼠のお母さんは泣きだしてしまいました。

「ああこの児はどうせ病氣になるならもつと早くなればよかった。さつきまであれ位ごうごうと鳴らしておいでになつたのに、病氣になるといっしょにびたつと音がとまつてもうあとはいくらおねがひしても鳴らしてくださらないなんて。何てふしあわせな子どもだろう。」

ゴーシュはびつくりして叫びました。

「何だと、ぼくがセロを弾けばみみずくや兎の病氣がなおると。どういうわけだ。それは。」

野ねずみは眼を片手でこすりこすり云いました。

「はい、ここのものは病氣になるとみんな先生のおうちの床下にはいつて療すのでございます。」

「すると療るのか。」

「はい。からだ中とても血のまわりがよくなって大へんいい気持ちですぐ療る方もあればうちへ帰ってから療る方もあります。」

「ああそうか。おれのセロの音がごうごうひびくと、それがあんまの代りになっておまえたちの病氣がなおるといふのか。よし。わかつたよ。やつてやろう。」ゴーシュはちよつとギウギウと糸を合せてそれからいきなりのねずみのこどもをつまんでセロの孔から中へ入れてしまいました。

「わたしもいっしょに行きます。どこの病院でもそうですから。」おつかさんの野ねずみはきちがいのようになってセロ

に飛びつきました。

「おまえさんもはいるかね。」セロ弾きはおっかさんの野ねずみをセロの孔からくぐしてやろうとしましたが顔が半分しかはいりませんでした。

野ねずみはばたばたしながら中のこどもに叫びました。

「おまえそこはいいかい。落ちるときいつも教えるように足をそろえてうまく落ちたかい。」

「いい。うまく落ちた。」こどものねずみはまるで蚊かのような小さな声でセロの底で返事しました。

「大丈夫だいじょうぶさ。だから泣き声出すなどいうんだ。」ゴーシユはおっかさんのねずみを下におろしてそれから弓をとって何とかラプソディとかいうものをごうごうががあが弾きました。するとおっかさんのねずみはいかにも心配そうにその音の工合ぐあいをきいていました。がとうとうこらえ切れなくなったふうで

「もう沢山たくさんです。どうか出してやってください。」と云いました。

「なあんだ、これでいいのか。」ゴーシユはセロをまげて孔のところところに手をあてて待っていました。間もなくこどものねずみが出てきました。ゴーシユは、だまってそれをおろしてやりました。見るとすっかり目をつぶってぶるぶるふるふるえていました。

「どうだったの。いいかい。気分は。」

こどものねずみはすこしもへんじもしないでまだしばらく眼をつぶったままぶるぶるふるふるえていましたがにわかにかきあがって走りだした。

「ああよくなったんだ。ありがとうございます。ありがとうございます。」おっかさんのねずみもいっしょに走っていましたが、まもなくゴーシユの前まえに来てしきりにおじぎをしながら

「ありがたいございますありがとうございます」と十ばかり云いました。

ゴーシュは何がなかあいそうになって

「おい、おまえたちはパンはたべるのか。」とききました。

すると野鼠はびっくりしたようにきよろきよろあたりを見まわしてから

「いえ、もうおパンというものは小麦の粉をこねたりむしたりしてこしらえたものでふくふく膨ふくらんでいておいしいものなそうでございますが、そうでなくても私どもはおうちの戸棚とだなへなど参ったこともございませんし、ましてこれ位お世話になりながらどうしてそれを運びに难道参れましょう。」と云いました。

「いや、そのことではないんだ。ただたべるのかときいたんだ。ではたべるんだな。ちよつと待てよ。その腹の悪いこどもへやるからな。」

ゴーシュはセロを床へ置いて戸棚からパンを一つまみむしつて野ねずみの前へ置きました。

野ねずみはもうまるでばかりのようになって泣いたり笑ったりおじぎをしたりしてから大じそうにそれをくわえてこどもをさきに立てて外へ出て行きました。

「ああ。鼠と話すのもなかなかつかれるぞ。」ゴーシュはねどこへどっかり倒たおれてすぐぐうぐうねむってしまいました。

それから六日目の晩でした。金星音楽団の人たちは町の公会堂のホールホールの裏にある控室ひかえしつへみんなぱつと顔をほてらしてめいめい楽器をもつて、ぞろぞろホールの舞台ぶたいから引きあげて来ました。首尾よく第六交響曲を仕上げたのです。ホールでは拍手はっしゅの音がまだ嵐あらしのように鳴おって居おります。楽長はポケットへ手をつつ込んで拍手なんかどうでもいいというようにそのそみんなの間を歩きまわっていました。じつはどうして嬉うれしさでいっぱいなのでした。みんなはたばこをくわえてマツチをすったり楽器をケースへ入れたりました。

ホールはまだばち手が鳴っています。それどころではなくいよいよそれが高くなって何だかこわいような手がつけられな  
いような音になりました。大きな白いリボンを胸につけた司会者がはいつて来ました。

「アンコールをやっていますが、何かみじかいものでもきかせてやってくださいませんか。」

すると楽長がきつとなつて答えました。「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したつてこっちの気の済むようには行  
くもんでないんです。」

「では楽長さん出て一寸挨拶してください。」

「だめだ。おい、ゴーシュ君、何か出て弾いてやってくれ。」

「わたしがですか。」ゴーシュは呆氣にとられました。

「君だ、君だ。」ヴァイオリンの一番の人がいきなり顔をあげて云いました。

「さあ出て行きたまえ。」楽長が云いました。みんなもセロをむりにゴーシュに持たせて扉をあけるといきなり舞台へゴーシュ  
を押し出してしまいました。ゴーシュがその孔のあいたセロをもつてじつに困つてしまつて舞台へ出るとみんなはそら見るとい  
うように一そうひどく手を叩きました。わあと叫んだものもあるようでした。

「どこまでひとをばかにするんだ。よし見ている。印度の虎狩をひいてやるから。」ゴーシュはすっかり落ちついて舞台のまん  
中へ出ました。

それからあの猫の来たときのようにまるで怒つた象のような勢で虎狩りを弾きました。ところが聴衆はしいんとなつて一  
生けん命聞いています。ゴーシュはどんどん弾きました。猫が切ながつてばちばち火花を出したところも過ぎました。扉へから  
だを何べんもぶつつけた所も過ぎました。

曲が終るとゴーシュはもうみんなの方などは見もせずちようどその猫のようにすばやくセロをもつて楽屋へ遁げ込みました。

すると楽屋では楽長はじめ仲間がみんな火事にでもあつたあのように眼をじつとしてひっそりとすわり込んでいます。ゴージュはやぶれかぶれだと思つてみんなの間をさつさどあるいて行つて向うの長椅子へどつかりとからだをおろして足を組んですわりました。

するとみんなが一ぺんに顔をこつちへ向けてゴージュを見ましたがやはりまじめでべつにわらっているようでもありませんでした。

「こんやは変な晩だなあ。」

ゴージュは思いました。ところが楽長は立つて云いました。

「ゴージュ君、よかつたぞお。あんな曲だけでもここではみんなかなり本気になつて聞いてたぞ。一週間か十日の間はずいぶん仕上げたなあ。十日前とくらべたらまるで赤ん坊と兵隊だ。やろうと思えばいつでもやれたんじゃないか、君。」

仲間もみんな立つて来て「よかつたぜ」とゴージュに云いました。

「いや、からだが丈夫だからこんなこともできるよ。普通の人なら死んでしまうからな。」楽長が向うで云つていました。

その晩遅くゴージュは自分のうちへ帰つて来ました。

そしてまた水がぶがぶ呑みました。それから窓をあけていつかつこの飛んで行つたと思つた遠くのそらをながめながら「ああかつこう。あのときはすまなかつたなあ。おれは怒つたんじゃなかつたんだ。」と云いました。

底本…「新編 銀河鉄道の夜」新潮文庫、新潮社

1989 (平成元) 年6月15日発行

1994 (平成6) 年6月5日13刷

底本の親本…「新修宮沢賢治全集 第十二巻」筑摩書房

1980 (昭和55) 年1月

入力…水口充、野口英司

校正…野口英司

1999年7月23日公開

2008年10月25日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

